

台湾における果実の 生産・流通・消費事情等調査報告書

中央果実基金・海外果樹農業情報No.89

1 はじめに

台湾はパイナップル、バナナ、マンゴー、カンキツ類、ナシ、ブドウ等の熱帯・亜熱帯および温帯果実を生産し、我が国はバナナやパイナップル等の他ブドウ等の温帯果実を輸入する一方、台湾は2002年1月にWTO加盟が認められて以降、その経済発展と相まってリンゴを中心に我が国産果実の輸出が急増し、最大の輸出先国となっている。国農産物の輸出拡大が喫緊の課題となっている中で、果実の輸出先としての台湾の重要性は今後ますます高まってくるものと思われる。このため、財団法人交流協会に委託して、台湾における果実の生産・流通・消費事情等についての調査を実施した。

2 台湾の農業および果樹農業の概況

(1) 台湾経済に占める農業の地位

台湾の総面積3.6万km²のうち、平地は27%、山地は73%であるが、全土の半分以上が農林水産業に直接使用されている。耕地面積は約84万haで、全土の約4分の1を占めており、そのうち43.3万ha(51%)が水田であり、41.1万ha(49%)が畑地である。

台湾農業は、豊富な雨量、温暖な気候等の恵まれた自然条件下で、水利施設の整備・土地基盤の整備等が行われることにより多毛栽培が行われ、土地が高度に利用されている。そして、「農業によって工業を育てる」という政策の下、経済発展の基礎を築き上げてきた。

近年、工業の急速な発展に伴い、農業の台湾経済に占める地位は急速に低下しつつある。国内総生産(実質)に占める農業のウエイトは1970年の15.5%から2004年には1.7%と大きく減少している。しかしながら、経済政策においても工業と農業のバランスのとれた発展が強く推進されており、国民経済の基礎、民生安定の要素として依然重要な地位にある。

(2) 総輸出入額に占める農林水産物の割合

台湾は、過去、米、砂糖を多く輸出しており、農産物の輸出国であった。しかし、工業部門の急速な成長による農業部門の生産の停滞により、1974年に農産物の輸入は輸出を上回るようになり、「農産物輸入国」へと転換した。

総輸出入額に占める農林水産品の割合は1965年以前は50%以上、1981年までは10

表1 農業生産額の作物別内訳

(単位：百万NT\$, 億円, %)

		計	稲	特用作物	野菜	果実	花卉
台湾	金額	162,301	27,511	7,116	40,728	63,654	12,526
	割合	100.0	17.0	4.4	25.1	39.2	7.7
日本 (参考)	金額	66,074	23,427	3,255	21,035	7,415	4,363
	割合	100.0	35.5	4.9	31.8	11.2	6.6

出所：行政院農業委員会「農業統計年報」、農林水産省「食料需給表」

注：台湾は2004年、日本は2003年の値

%台を維持していたが、その後徐々に下降し、2004年には2.0%となっている。また、2004年の輸入額は、約88億6千万US\$であり、総輸入額の5.3%が農林水産品である。輸入に関しては米国からの穀物が大きな割合を占めており、農林水産品輸入額に占める米国の割合は29.5%となっている。

(3) 台湾農林水産業に占める果樹農業の地位

台湾は、高山を有し、気候が熱帯から亜熱帯まで分布するため、熱帯果実から温帯果実まで様々な果実が生産され、果実の宝庫である。といえる。また、農林水産業の総生産額に占める農業生産の割合は42%となっており、農業生産額に占める果樹の割合は40%近くに達しており、種類数だけではなく、大量の果実が産出されている(表1)。

(4) 台湾における果実の消費状況

台湾における果実の消費(2001年)は、1人1年当たり146.6kgとなっており、日本における果実の消費量(54.4kg)

よりかなり高い水準となっている。これは、台湾では食事の後、必ずデザートとして果実を食べるといった食習慣によるものと思われる。

(5) 台湾における果実の生産状況

台湾における主要な果実の生産量は、パイナップルの生産量が最も多く、果実全体の生産量の17%となっており、近年増加傾向にある。次いで生産量の多いのはリュウデン(シールオレンジ)で、果実全体の生産量の8%となっており、近年増加傾向にある。3番目に生産量の多いバナナは、果実全体の生産量の7%で1990年代後半より20万t前後で推移している。4番目に生産量の多いグアバは、果実全体の生産量の7%となっており、2002年以降減少傾向にある。以下、マンゴー、ピンロウジ、パパイヤ、ナシ、ポンカン、リュウガンといった順になっている(表2)。

(6) 台湾における果実貿易の現状

① 輸出(代表的な果実)

台湾は農産物の輸入国であるが、生産

表2 台湾における果実の収穫面積および生産量

(単位:千ha,千t)

	1999		2002		2003		2004	
	面積	生産量	面積	生産量	面積	生産量	面積	生産量
果実計	206.5	2,659.1	210.5	2,686.3	209.8	2,832.5	207.3	2,729.1
パインアップル	7.3	348.5	9.1	416.3	9.9	447.8	10.4	458.5
リュウデイン	7.6	121.4	8.6	142.7	8.7	204.6	9.5	211.4
バナナ	9.0	212.5	9.6	226.5	9.6	223.1	9.2	189.9
グアバ	6.8	173.9	7.4	203.6	7.5	198.4	7.3	184.7
マンゴー	18.7	206.9	19.0	213.4	18.9	220.5	18.6	182.2
ピンロウジ	51.2	170.0	51.2	162.3	50.8	159.6	50.1	143.4
パパイヤ	3.7	158.9	3.3	144.6	3.2	144.6	2.7	133.6
ナシ	8.6	117.5	8.6	123.0	8.7	122.1	8.4	124.9
ポンカン	8.7	121.9	7.6	105.7	7.2	105.4	7.2	107.1
リュウガン	11.4	129.0	11.9	110.9	12.0	134.6	11.9	102.3
ブドウ	3.0	106.6	3.0	85.0	3.1	92.1	3.1	97.9
シャカトウ	4.8	56.4	5.3	55.3	5.4	48.3	5.5	89.2
ブンタン	6.2	89.6	6.0	74.5	5.8	88.6	5.7	87.4
レイシ	11.6	108.7	11.3	81.0	11.4	104.2	11.4	82.1
レンブ	7.7	104.0	7.5	95.1	7.3	92.7	7.1	68.7
タンカン	4.9	65.6	4.2	54.2	4.2	55.0	4.0	56.8
ウメ	8.8	55.4	8.9	45.2	8.7	53.9	8.0	57.0
ココナツ	4.2	44.3	4.5	49.3	4.2	44.2	4.2	47.6
カキ	2.4	25.8	3.0	34.7	3.1	38.2	3.1	36.2
スモモ	4.6	39.9	4.1	34.4	3.8	34.7	3.6	35.3
モモ	2.5	23.4	2.7	29.4	2.6	31.3	2.7	29.5
ナツメ	1.6	25.9	1.6	28.2	1.7	27.3	1.9	27.6
スターフルーツ	1.7	30.1	1.7	27.2	1.7	26.1	1.6	26.5
リンゴ	0.8	8.2	0.8	9.7	0.6	3.4	0.6	6.5

出所:行政院農業委員会「農業統計年報」

力の高い一部農産物については、より所 ている。
 得水準の高い国、地域に対して輸出を行っ 輸出量については、バナナ、マンゴー、

表3 果実輸出の推移(品目別・代表的果実)

(単位:t)

	1999	2000	2001	2002	2003	2004
果実計	65,810	58,742	41,447	46,853	75,079	48,991
バナナ	44,913	42,603	25,643	24,757	33,160	18,141
マンゴー	4,997	2,471	3,222	5,555	12,623	5,013
レイシ	5,849	3,588	3,503	3,451	6,445	3,440
オレンジ類 +ポンカン	1,971	1,620	1,197	2,547	3,546	2,658
パインアップル	1,042	843	947	381	905	1,192
ウメ	728	729	837	1,061	1,181	1,191
ブドウ	97	230	124	56	131	101

出所:行政院農業委員会「農産貿易統計要覧」

表4 果実輸出の推移 (国別)

	(単位：t)					
	1999	2000	2001	2002	2003	2004
総計	65,810	58,742	41,447	46,853	75,079	48,991
日本	47,488	45,059	27,787	26,359	35,147	20,726
香港	10,647	8,543	8,387	12,794	22,983	15,455
米国	1,694	2,359	2,356	3,007	3,315	3,610
シンガポール	1,359	941	1,172	2,407	5,969	3,214
カナダ	1,326	994	1,059	1,426	3,408	3,214
フィリピン	2,312	606	432	403	1,853	1,429
中国大陸	0	0	0	0	263	657
インドネシア	138	40	2	8	380	193
大韓民国	0	0	0	1	0	187
マレーシア	141	98	33	132	573	181

出所：行政院農業委員会「農産貿易統計要覧」

レイシといった熱帯果実の輸出が多い(表3)。

輸出先では、地理的に近い日本への輸出が最も多く、香港、米国が続いている。

台湾当局は日本を農産物輸出の最大の市場と位置づけている。また、日本における台湾産マンゴーの需要が旺盛である。こと、パパイヤの植物検疫にかかる検疫条件の締結を受け、2005年から本格的にパパイヤ輸出が開始されることなどを勧案すると、今後、果実の対日輸出はますます増加するものと思われる(表4)。

② 輸入 (代表的な果実)

台湾においては、果実の栽培に適した

気象条件、旺盛な果実需要を背景に、果実の自給率は9割弱と高い水準を維持しており、栽培が困難な温帯果実を中心に一部輸入が行われている。

輸入量については、リンゴの輸入量が最も多く、続いて、モモ、ブドウとなっている(表5)。

輸入元については、リンゴを多く輸入している米国が首位であり、タイ、チリがそれに続いている(表6)。

なお、台湾での果実の輸入は貨物での輸入のみ可能となっており、個人の携行品による持ち込みは禁じられている。

表5 果実輸入の推移 (品目別・代表的な果実)

	(単位：t)					
	1999	2000	2001	2002	2003	2004
果物計	374,816	388,337	366,286	379,334	347,452	344,603
リンゴ	136,627	130,219	124,606	117,662	108,745	116,828
モモ	36,550	43,738	46,971	45,928	38,559	40,263
ブドウ	15,781	21,644	16,770	20,346	17,537	21,587
オレンジ類	21,680	23,471	24,384	17,303	16,588	13,504
ナシ	4,000	5,592	4,781	8,329	10,613	12,438

出所：行政院農業委員会「農産貿易統計要覧」

表6 果実輸入の推移 (国別・代表的な果実)

	1999	2000	2001	2002	2003	2004
総計	374,816	388,337	366,286	379,334	347,452	344,603
米国	233,877	235,484	231,369	168,297	139,126	151,349
タイ	46,356	49,190	42,680	62,319	51,993	41,930
チリ	15,695	16,615	17,486	25,587	33,617	35,368
ニュージーランド	15,790	16,211	15,699	26,284	25,317	29,177
中国大陸	24,202	28,853	22,041	26,620	28,572	26,002
日本	2,319	2,097	2,273	9,619	16,803	12,168
ベトナム	8,541	11,224	12,619	11,115	10,407	11,657
大韓民国	128	0	0	13,421	11,702	11,363
オーストラリア	7,538	8,448	7,243	15,189	10,225	9,133
南アフリカ	2,178	2,104	1,961	8,306	8,639	7,035

出所：行政院農業委員会「農産貿易統計要覧」

2 生産・流通・販売等状況

台湾における主要な果実の生産・流通・販売等の状況は以下のとおりである。なお、果実の価格調査は日本産農産物の流通量が増える中秋節（旧暦の8月15日で2005年は9月18日）および年末年始から春節（旧正月で2006年は1月29日）の時期（以下、「中秋節」および「春節」とする）に日系百貨店等において行った。調査時のレートは1NT\$（台湾通貨）＝約3.3円である。＜注：温帯果実についての記述を抜粋した。＞

(1) ナシ

① 生産状況等概要

台湾におけるナシの栽培は、中部地域において多く生産されており、生産量は年々増加傾向にある。2004年の収穫面積は、8,379ha、年間生産量は約12.5万tとなっている。国内農家保護のため、WTO加盟後は関税割当制度により輸入

しており、実質この1次枠でしか入ってこない。このため、台湾産は流通量の9割程度を占めている。

台湾で栽培されているナシの多くは日本の品種であり、「豊水」、「新興」、「新世紀」が多く、一部、「新高」、「二十世紀」といった品種も見かけることがある。日照等栽培環境に恵まれ、それを生かした栽培法により、単収は高いようである。しかし、上述の栽培法によるものと考えられるが、日本産に比べ、水分が少ないといった品質の違いが見られるようである。

② 国別輸出輸入状況

台湾のWTO加盟以前には、米国、日本が主要なナシの台湾向け輸出国であった。しかし、WTO加盟後には韓国産からの輸入が急激に増加しており、2004年時点では輸入量の7割近くに達している（表7）。

韓国産の主力品種は「新高」であり、その大きさ、糖度等品質は日本産に匹敵

表7 ナシの輸入量の推移

(単位: t)

	1999	2000	2001	2002	2003	2004
総計	4,000	5,592	4,781	8,329	10,613	12,438
韓国	0	0	0	5,154	7,130	8,506
米国	3,488	5,202	4,231	2,373	2,742	2,681
日本	379	353	550	549	717	1,158
ニュージーランド	7	0	0	35	24	49
オーストラリア	126	37	0	129	0	33

出所：行政院農業委員会「農産貿易統計要覧」

する水準まで向上しつつある。日本からも「新高」が輸入されているが、価格が韓国産の2倍ほどするため、韓国産が日本産として偽装され台湾市場で流通する偽装梨問題も生じている。

日本産の主力品種は鳥取県の二十世紀であり、中秋節のギフト需要として好評を博しているが、一方で大量出荷により品質が十分でないナシが出回るケースも生じている。

③ 日系百貨店等における販売価格

中秋節には、日本産は「二十世紀」、
「新高」、
「幸水」、
西洋梨が販売されていた。「二十世紀」は皆同じ大きさで、価格(1個当たり。以下同じ)は150~180 NT\$であった。「新高」はやや小ぶりなものも含めて250~600 NT\$であった。この他、「幸水」、西洋梨は少量しか見かけなかったが、価格は順に、130~175 NT\$, 179~198 NT\$であった。台湾産は、「豊水」、
「新世紀」、
「新興」、
「二十世紀」、
「雪梨」が見られた。「豊水」、
「新世紀」が最も流通しているようである。「豊水」は中玉65~129 NT\$, 小玉22~25 NT\$となっている。「新世紀」で

は、特に大きいものは159 NT\$, 量の多い中玉は90~133 NT\$, 小玉は24~59 NT\$となっていた。「新興」、
「二十世紀」(日本のものより小さい)、
「雪梨」は少量であったが、価格は順に、20~100 NT\$, 45 NT\$, 113 NT\$となっていた。韓国産の「新高」も見られた。やや小ぶりなものも含めて120~185 NT\$の価格であった。

春節には、日本産は「二十世紀」、
「新高」、
「にっこり」、
「南水」、
「晩三吉」等が流通していた。「二十世紀」は中秋節より流通量はやや少なめな印象で、価格は150~200 NT\$となっていた。「新高」は中秋より多く、「にっこり」、
「南水」は少量だが見かけられ、価格は順に、250~300 NT\$, 200 NT\$, 180 NT\$であった。韓国産の「新高」は日本産のものよりはるかに多く流通しており、価格帯はやや小ぶりなものも含めて89~190 NT\$と日本産の半値以下で販売されていた。台湾産は、「新世紀」、
「雪梨」、
「新興」が多く見かけられ、価格はやや小ぶりなものも含めて順に24~158 NT\$, 75~209 NT\$, 120~139 NT\$となっていた。

(2) ポンカン

① 生産状況等概要

英語名はPonkanでありその発音から中国語では「椪柑」と書く。原産はインドで、台湾では多く栽培されている。中部地域での栽培が多く、2004年の収穫面積は、7,152 ha、年間生産量は約10.7万tとなっている。

② 国別輸出輸入状況

台湾では、ポンカンの輸入はほとんど行われていない。また、輸出についても2001年まではカンキツ全体輸出の9割以上を占めていたが、その後急減し、現在はほとんど行われていない。

③ 日系百貨店等における販売価格

ポンカンは、春節の調査で見かけられ、1個当たり16～29 NT\$で販売されていた。

なお、日本産の「不知火（デコポン）」（ポンカンと「清見」の交配種）が日系百貨店で見受けられたが、1個当たり550 NT\$と、台湾産ポンカンとはかけ離れた価格で販売されていた。

(3) ブドウ

① 生産状況等概要

台湾のブドウは、約300年前に中国から導入された。戦前には趣味園芸で一部栽培されていただけであるが、1955年から、酒造用ブドウの試作のため大面積での生産が始まり、1961年には、「巨峰」の導入と多毛作の確立により、栽培面積が急増した。2004年の栽培面積は、3,133

haに達し、生産量は約9.8万tとなっており、海外輸出を含め台湾でも戦略的に重要な果樹のひとつである。台湾産ブドウの主な産地は、中部の低海拔山地および水田地帯などとなっている。

現在台湾で栽培されている品種の多くは、米国種、欧州種を掛け合わせた交雑品種であり、「巨峰」が最も多く生産されている。

② 国別輸出輸入状況

台湾におけるブドウの輸入は、かつて米国からの輸入がほとんどであったが、台湾のWTO加盟後は自由化され、各国から輸入できるようになった。現在、米国は総輸入量の6割弱までシェアを落とし、次いでチリ、南アフリカが続いている。日本からの輸入も少量であるが存在し、種無し「ピオーネ」、種無し「巨峰」等の贈答品が多くなっている（表8）。日本から台湾にブドウを輸出する際は、種無し等の付加価値が必須である。

台湾では「巨峰」が多く生産されており、台湾産が流通量の8割強を占めている。その品質は総じて高く、日本産にも匹敵するレベルであり、少量ではあるが日本に対しても輸出を行っている（表9）。

③ 日系百貨店等における販売価格

中秋節においては、日本産の種無し「巨峰」、種無し「ピオーネ」の1房当たりの価格（以下同じ）はそれぞれ、399～1200 NT\$, 750 NT\$となっていた。台湾産の一般の「巨峰」の価格は39～130 NT\$であり、黒みがかった贈答用の

表8 ブドウの輸入量の推移

(単位:t)

	1999	2000	2001	2002	2003	2004
総計	15,781	21,644	16,770	20,346	17,537	21,587
米国	15,200	21,030	16,183	12,366	8,612	12,209
チリ	571	614	587	5,511	7,819	7,072
南アフリカ	0	0	0	877	871	1,280
オーストラリア	0	0	0	1,463	150	617
インド	0	0	0	31	33	335
日本	0	0	0	39	52	73

出所: 行政院農業委員会「農産貿易統計要覧」

表9 ブドウの輸出量の推移

(単位:t)

	1999	2000	2001	2002	2003	2004
総計	97	230	124	56	131	101
日本	97	230	118	55	112	84
香港	—	—	6	1	6	17

出所: 行政院農業委員会「農産貿易統計要覧」

「巨峰」は240~246 NT\$で売られていた。米国産のブドウは、110~133 NT\$であった。

春節においては、日本産の「スチューベン」が見かけられ、300 NT\$で販売されていた。台湾産の「巨峰」は39~150 NT\$であり、米国産のブドウは、86~131 NT\$の価格帯であった。

(4) モモ

① 生産状況等概要

モモは中国大陸が原産地であるが、外観が美しく風味もよいため人気があり、現在では世界中で栽培されている。台湾のモモは、中国大陸南部から導入したものと考えられている。台湾のモモ産地は、中部地域に集中しており、臺中縣が最も生産量が多く、総生産量の約6割を占めている。2004年の収穫面積は2,667 ha、

年間生産量は約2.9万tとなっている。

品種は、日本などから導入された「松本早生」、「砂子早生」、「白鳳」、「大久保」、「中津白桃」、「瀬戸内白桃」、「川中島白桃」、「大玉白鳳」、「紅鳳」などが栽培されている。日本の品種は、品質、色合い、風味ともに優れているため、人気が高い。このほか、台湾の農業試験研究機関の開発した水蜜桃品種の「台農甜蜜」なども栽培されている。

② 国別輸出輸入状況

モモは台湾においてリンゴの次に輸入量の多い果実である。流通量の約6割弱が輸入品で、その約8割強が米国産であり、ほかチリ、オーストラリア、日本等から輸入されている(表10)。

モモの輸入のピークは中秋節前であり、中秋節のギフト需要の際には、日本産はナシの「二十世紀」とともに戦略商品と

表10 モモの輸入量の推移

(単位：t)

	1999	2000	2001	2002	2003	2004
総計	36,550	43,738	46,971	45,928	38,559	40,263
米国	32,192	38,327	42,013	39,147	32,731	34,311
チリ	746	1,204	2,137	1,533	1,688	3,501
オーストラリア	3,065	3,759	2,634	4,515	3,803	1,993
日本	0	0	0	460	306	362
ニュージーランド	546	431	186	126	9	79

出所：行政院農業委員会「農産貿易統計要覧」

なる。

③ 日系百貨店等における販売価格

中秋節の調査で見かけられ、日本産は水蜜桃と黄金モモが販売されていた。

1個あたりの水蜜桃はやや大ぶりなものも含め200～350 NT\$, 黄金桃は210～250 NT\$で販売されていた。米国产の水蜜桃は、小ぶりなものも含め70～200 NT\$となっていた。この他、米国产の小粒で安価なモモがあったが、それは27～50 NT\$であった。他国产では、カナダ産水蜜桃、韓国産黄金桃を見つけたが、それぞれ22 NT\$, 250 NT\$という価格であった。

(5) リンゴ

① 生産状況等概要

リンゴが台湾に導入された時期は、1929年ごろであり、台湾の高山地帯での栽培が行われるようになった。台湾のWTO加盟により、リンゴの輸入が解禁され、価格は大幅に下がり、台湾におけるリンゴの栽培は減少傾向にある。現在では、中部の高山地帯において少量生産されているのみであり、生産量は総流通

量の5%程度にすぎない。2004年における収穫面積は621 ha、年間生産量は約6千tとなっている。

② 農産物の国別輸出輸入状況

リンゴは台湾で最も輸入量の多い果実である。外国から年中輸入され周年供給されている。「ふじ」は多くの国から輸入されており、比較的高値で売られている。外国産「ふじ」は日本産に比べ小玉のものが多く、日本産とは価格の面でも棲み分けがなされている。この他、ゴールドデリシャス等も多く見られ、低価格で販売されている。

国別に見ると、米国からの輸入量が圧倒的に多く、台湾のWTO加盟以前は総輸入量の8割を占めていた。しかし、近年、米国产リンゴからコドリングが発見され輸入が一時ストップしたこともあり、チリ産、ニュージーランド産等にシェアを奪われ、5割強までシェアを落としている。

日本産の輸入もWTO加盟以降大きく輸入量を増やしている(表11)。日本産(特に青森産)は既にブランド化されている。近年は大玉の贈答需要だけではな

表11 リンゴの輸入量の推移

(単位：t)

	1999	2000	2001	2002	2003	2004
総計	136,627	130,219	124,606	117,662	108,745	116,828
米国	109,282	103,068	100,490	66,685	48,613	63,008
チリ	12,410	12,378	12,492	15,333	20,673	20,757
ニュージーランド	7,944	7,990	5,414	14,197	14,236	17,349
日本	1,794	1,647	1,696	8,376	15,626	10,417
韓国	0	0	0	7,839	4,432	2,694

出所：行政院農業委員会「農産貿易統計要覧」

く、中・小玉の一般消費向けも多く輸入されるようになった。

③ 日系百貨店等におけるリンゴの販売価格

中秋節前後には、日本産は高級品の大玉の他、低価格帯の中・小玉まである。ため、価格幅が大きい。1個当たりの価格(以下同じ)は「ふじ」の大玉では125～150 NT\$, 中小玉では25～85 NT\$となっていた。他国産「ふじ」では、米国産、チリ産、ニュージーランド産があった。米国産には大玉は見あたらず、中小玉が15～60 NT\$で販売されていた。60 NT\$のような高価格のものはほんの少数であった。チリ産、ニュージーランド産も同じような価格帯のようである。チリ産の大玉高級品が95 NT\$で売られていた。この他、デリシャス系リンゴは

「ふじ」より若干安く価格設定されており、中、小玉で8～23 NT\$であった。

節前後には、日本産は「ふじ」の大玉では79～150 NT\$, 中小玉では29～88 NT\$となっていた。他国産「ふじ」では、米国産、韓国産、チリ産、ニュージーランド産、台湾産があった。米国産には大玉は見あたらず、中小玉が12～53 NT\$で販売されていた。他国産「ふじ」も同じような価格帯である。日本産ではこの他、「王林」、「金星」、「世界一」、「陸奥」等の多くの品種が見られ、価格は順に29～100 NT\$, 75～158 NT\$, 99～289 NT\$, 160～199 NT\$となっている。この他、デリシャス系リンゴは「ふじ」より若干安く価格設定されており、中、小玉で18～29 NT\$であった。